

青年海外協力隊員としての派遣先がザンビアと決まったとき、まずはザンビアという国を地図で探してみましたがすぐには見つけることができず、アフリカ大陸に位置する 8 か国に囲まれた内陸国といっても全く何も想像ができませんでした。

日本からザンビアへの渡航は南アフリカ経由で行くのが一般的ですが、南アフリカーザンビア間の飛行機は揺れに揺れて、「これはアフリカの洗礼ではないか」と初めてのアフリカ渡航は緊張の連続でしたが、ザンビアの地に降り立ったときのからっとした気候は快適で、出発前に勝手に想像していた「アフリカといえば、暑くて砂漠」ではなく、安心したことをよく覚えています。

私は 2008 年 6 月から約 2 年間、青年海外協力隊としてザンビアの首都ルサカにある NGO に派遣されましたが、全く何も知らないで飛び込んだアフリカのザンビアという国で、アフリカで生きていくために必要な知恵を学びました。そのうちのいくつかをエピソードも交えて紹介します。

1. 遅刻は相手に失礼か？ ザンビア時間のとらえ方

「僕に失礼ではないか！」

朝 9 時に会う約束をしていたデリックさん（43 歳の男性）が昼頃になってようやく姿を見せ、何事もなかったようにいすに座ったのを見て、僕は思わず声を荒らげた。

この日は朝 8 時半にも別の人とアポが入っていたが、彼も 30 分以上の遅刻。なんで時間通りに来ないのかと問い詰めると、「7 時半にはこの近くにいたんだけど、同行者が遅れ…」と言い訳をする。面会をお願いしてきたのはそっちなのに、待たされるのはこっちだ。

言い訳の多さもさることながら、普通に時間を守らないこの感覚が信じられない。「ザンビア人の良さは相手に敬意を払うこと」と僕は機会があるたびに言っていただけに、釈然としない気持ちが残る。

その疑問を同僚のピリーさん（35 歳の男性）にぶつけてみた。すると「ザンビア人は時間に対して寛容なんだよ。これは文化かな」と答える。

「例えばザンビア人家庭は、来客を最高の料理でもてなすでしょ？ 来客もそれを期待してやって来る。そのときに失敬な行為に当たるのは、時間ピッタリにドアのベルを鳴らすことではなく、出された料理を残さずに食べ切ること」

時間を守らないと色々不都合が生じるのではと思いきや、そうでもないらしい。「30 分の遅刻を見込んでみんな行動している」とザンビア人が言うように、ザンビア社会は「遅刻が常識」の上に成り立っている。

そもそも時間のとらえ方が違う。英語の「afternoon」は正午から午後 5 時をさすが、ザンビアのニャンジャ語では正午から午後 2 時を「ムズワ」、午後 2～5 時は「マゾロ」と使い分けている。ザンビアにはザンビア流の時間の認識があるのだ。

そういったなかで日本人である僕は彼らとどうやって共通認識を得ていくのか。前出のデリックさんは「日本人への敬意」を払って、翌日は約束時間の30分前に現れた。僕も、「遅刻は失礼ではない」という彼らの文化を理解しながら、「ザンビア人への敬意」をもった接し方を心がけるようになった。

2. 日本人としての国際人 ザンビアには国際人を育てる土壌がある

「Give me money」と何度言われたただろうか。普段は懐深いと思われるザンビア人もお金の話になるとなりふりかまわない。何度お金を貸したとか…。カネのトラブルで自己破産に追い込まれた私の父親の姿を見てきたので、できればカネの貸し借りをしたくなかった。本当は一緒に考えて「知恵」を与えてあげられればいいのだけど、彼らの生活を知るほど簡単にそれは思いつかない。

お金を貸しても返してもらえず、借入書が10枚たまったことがある。お手伝いさんを雇ったら、自宅の日本食を盗まれたり、強盗事件にも巻き込まれたこともある。国民の6割以上が貧困に喘いでいるその現実を目の当たりにした。

私は、これまでの自分自身の遺児体験やそのための募金活動を通して、「思いを形にする」「人は愛した分だけ愛される」ということ学んできた。私は一方通行でGIVEしていたが、私が困っているときには誰も助けてくれなかった。口では心配してくれるが実際に行動で示してくれる人はいなかった。彼らが見ているのは僕ではなくその背後にあるお金だけではないか。そんなことを何度も思わされた。

だが、ひとつの太鼓が変化をもたらした。在ザンビア日本大使館にある和太鼓を借りられたこともあって、(全く経験がなかったが)和太鼓を独自に練習するようになった。そのうち、ザンビア人に披露する機会があり、ザンビア全土を巡回した日本文化紹介イベントでは、ソーラン隊と一緒にいつも和太鼓披露をした。

興味を持ったザンビア人が、「もう一度演奏してくれないのか」、「なにか一緒にできないか」と声をかけてくれる。具体的に行動すると協力してくれる人が現れるようになった。もちろん彼らもお金はない。でも、そんななかでも彼らはなけなしのお金とありあまる労働力を提供してくれた。ザンビアにはお互いが助け合う「隣人力」があると聞いていたが、それはザンビア人の間だけに存在すると思っていた。だが、その「隣人力」はこのキリスト教の国にやっぱりあるのだと感じるようになった。

それまでの私はザンビアが抱える貧困問題に対して、ザンビア人と同じ立ち位置に身を置くことばかり考えていが、実は、相手に合わせるという極めて日本的な行動パターンを繰り返していたようだ。国際人とは、無国籍の根無し草では決してなく、日本人としての自分という土台があってそのうえに成り得るものであると考えるようになった。

青年海外協力隊としての任期を終えて約3年が経ちましたが、「アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカに帰る」という言葉は本当で、いま現在もアフリカ出

張が多い仕事に携わっています。アフリカ 12 カ国目として、先日もナイジェリアに 3 週間ほど滞在しましたが、初めての西アフリカ諸国でもザンビアで自然に身についた時間感覚や日本人として自分の立ち位置は、アフリカ人との接し方に大いに役立っています。特に、ザンビアに限らずアフリカ諸国で現地人も公言している「アフリカン・タイム」は、彼らが「あと 2 分」と言えば 10 分待つことを想定するようにアフリカ人の時間概念をよく表していますが、今では私もアフリカ人と接するときには自ずと先読みしています。

ザンビアに来る前に、「ザンビアはアフリカ入門である（アフリカの登竜門である）」と言われたことがあります。まさしくその通りで、ザンビアで学んだアフリカで生きる素養や現地感覚はアフリカで仕事をするうえで何にも代え難い経験でした。アフリカの第一歩がザンビアで良かったと思うと同時に、アフリカ諸国のなかでも気候が良くて過ごしやすく、世界遺産のビクトリアの滝やサファリで野生の動物が見られるため、一生のうちに少なくとも一度はぜひ行ってみるべき国であると強くお勧めします。



滞在中 8 回訪れた、雄大なビクトリアの滝



ザンビア全国各地で披露した和太鼓



アフリカのイメージを変えた首都ルサカ

オーピーエス株式会社
藤井 雅規